

素 囃 子 の 変 遷

(四)

竹 本 幹 夫

【シラバヤシの諸型 ①室町期】

ここでいうシラバヤシとは、〈三輪〉〈杜若〉の秘伝たるそれを指す。その最も正統的な演出は、由良家蔵『笛秘伝書下』や似我与左衛門国広の太鼓伝書のあるものに見えるが、次のような形であった。まず神楽又は序之舞の序があり、その部分にも特殊な習事を含むものであったらしい。序の後にシラバヤシが接続するが、普通は五段構成をたてまゑとし、為手の按配で段数が増減することもあった。演奏にあたっては太鼓と笛とが重要な機能を果たし、物着のアシライのごときリズム感を

こころした奏法を宗とし、ノリ拍子ではなく、「つながぬ拍子」と呼ばれるゆるやかで緩急の変化のない、手などの類も打たぬ単調なものであったらしい。笛はアシライ吹キであったようである。以上は〈松風〉〈鶏羽〉のシラバヤシの場合も同様であり、勿論〈三輪〉〈杜若〉の場合でも、序の形式が相違するのみであったが、神道と関わりとの理由から〈三輪〉を真、その他を草のシラバヤシとするのが通例であった。なお、〈杜若〉のシラバヤシを「よく

く」のりたるがよき」とする永青文庫藏天正十九年(一五九)細川幽斎奥書『太鼓聞書』などの説があるが、誤解にもとづく異説と考えられ、当時ほとんどシラバヤシが演じられることのなかった証左といつてよからう。

ところで、昭和53年8月の日本能楽会特別公演での桜間道雄氏の舞囃子〈杜若〉に「袖神楽・素囃子」という小書がついたことがあった。序之舞の序の後にイロエ的な譜にあわせて舞台を一巡し、さらに序之舞の後半部を接続したものであり、「昔男の名をとめて」といつて再びイロエ的な舞が付くものであったと記憶している。当日の解説には昭和41年復活の小書の由をいうが、これが金春流本来の特殊演出であった理論的可能性は皆無に等しいものの、先掲の正統的シラバヤシに対する室町末期の異式演出をその祖型としているらしい点は、興味深いものであった。

異式演出たることの第一は、〈杜若〉のシラバヤシが途中から序之舞に直る点である。前述の幽斎の太鼓伝書に「杜若のしらはやしのこと、いつもの序のある所にて白働是あり。

しら拍子斗、仕手の謡ひ出す事もあり。又、舞になりて謡ひ出す事もあり」というのが、管見に入ったその初出例らしいが、この演出は江戸期になっても残り、江戸後期の葛野流秘伝書『催花柳』にも、「杜若ハ序舞ノ所ニテ白ハヤシ斗ニテ謡出スモアリ、舞ニナリテ謡出スモアリ」とほぼ同文で記されている。〈杜若〉のシラバヤシを「よくく」のりたるがよき」とする説と同じ条の説くところであり、幽斎あたりの新案かとも考えたい形式ではあるが、断定はできない。

異式演出たることの第二は、シラバヤシの後、さらにイロエ的な舞事のある点である。室町末期には〈三輪〉のシラバヤシにこの演出が付随したらしいことが、弘治年間以前の内容を持つらしい演劇博物館本『遊舞集』に見える。「八百万の神達」という時に「かけりあり。ひやうてう返し」という内容で、これと一体の関係にあると思われる断片的記事が鴻山文庫蔵『笛遊舞集』や『童舞抄』などに散見する。元和三年(一六一七)奥書の藤田家蔵『梅花集律』には、〈三輪〉の場合「常闇の夜とはや成りぬ、〈杜若〉は「色ばかりこそ昔なりけれ」の後に、「カケル。呂ノ心ニ吹ク」とされる「クツロギノ段」が、シラバヤシの付随演出としてあったとされている。

ところで、観世元信氏蔵弘治三年(一五五

七) 国広奥書『条々』によれば、正統的シラバヤシ演出を記した後に、杜若につき、「昔男の名を留て」といひてそとくつろぎと申事あり」といひ、奏法はシラバヤシのそれに近く、「白拍子バ大夫もびたど拍子をふみ、殿の所、扇をも手本はやく取返候」云々とされている。又、由良家蔵慶長十六年(一六一一)奥書『花笛集上』にも、「杜若、舞よくくゝのりたるに、和哥の時、やすミと云事有り。……昔男の名を□□て」、休む、真の呂を吹へし。……是は此能に限らず、何れの序の舞の和哥ニても有事也」とある。両記事ともにシラバヤシ秘伝の後に、それとは別個の秘伝として配置されていることも付言しておこう。つまり、シラバヤシの後に更に簡単な舞事の入る形式は、正統的シラバヤシ演出とは本来無縁のものであり、舞の段の後に臨時的・即興的な舞事や働事を挿入する演出が、室町末期になり、シラバヤシの場合にも援用されることがあったということを、右の諸資料は示しているのではあるまいか。どくに注意したいのは、これらの舞事や働事の位置が必ずしも厳密に一定していたわけではないことである。そして、そうした即興的・非定型の働事や舞事も又、シラバタラキ・シラバヤシと呼ばれ得るものであったという例も想起せねばなるまい。△三輪や杜若のシラバヤシ

の後に、臨時に後の舞を挿入したものが、いわゆる「袖神楽・素囃子」の小書の祖型の一部をなしたのである。

結局のところ、室町末期の△三輪×杜若のシラバヤシには、少なくとも三通りの演出があり、うち二通りは、正統的演出から派生した異式演出であったことになる。ところがこれら両演出は、それが異式演出であるという立場が明確にされておらず、ために、一見それが正統か判別しがたい場合もある。諸資料を俯瞰した上で、資料の素性の確かさと内容上の豊富さや体裁等から、第一の演出を正統と認めるのが拙稿の立場であるが、こうした資料的な混乱はそのまま室町末期のシラバヤシ秘伝をめぐる混乱でもあったのであろう。この混乱は、江戸期に入ると、下掛り系統のシラバヤシ秘伝の登場等の事態と相まって、いよいよその度合いを増すことになる。現行観世流の素囃子も、そうした時代を通じて再編されていった新演出なのである。なお、上記両演出が、正統的シラバヤシ演出が他の秘伝や習事を併合・吸収する過程で生じたものであるという点については、その習事としての消長を述べる際に考察するであろう。

(未完)